



Title	ゴンチャロフ『日本渡航記』再読：内外の史料との比較で
Author(s)	沢田, 和彦
Citation	一橋論叢, 114(3): 572-584
Issue Date	1995-09-01
Type	Departmental Bulletin Paper
Text Version	publisher
URL	http://doi.org/10.15057/12166
Right	

ゴンチャローフ『日本渡航記』再読

—内外の史料との比較で—

沢田和彦

はじめに

一八五三年八月十日⁽¹⁾、ロシアの作家イワン・アレクサンドロヴィチ・ゴンチャローフ(一八一二—一八九二)はプチャーチン提督付きの秘書官として、フリゲート艦パルラダ号で長崎に来航した。プチャーチン来航の目的は、日本との通商交渉とサハリンでの国境画定である。この一月前、アメリカのペリー提督率いる四隻の黒船が浦賀に来航して開国を迫り、二百年以上の鎖国状態にあった日本の人心を驚愕せしめたが、ロシア船の出現はこれに次いで日本にとっての衝撃的事件となった。ロシア使節に対して日本側がとった態度は、ひたすら延引策にこれ努めることだった。ロシア側は辛うじて国書を受領

させたものの、最初の三カ月は日本側から何ら返答を得られず、江戸から四人の全権員が到着して本格的な交渉が始まったのは、翌年一月七日のことだった。しかし交渉は不首尾に終わり、ロシア側が得たものは最惠国待遇の約束のみである。

日本の役人たちの幾人かは長崎旅行時に日記をつけていた。またゴンチャローフと共に来日したロシア人の記録や長崎オランダ商館長の覚え書が公刊されている。本論文では『日本渡航記』⁽²⁾とこれら内外の史料の記述を対比しつつ、気づいたことを述べてみたい。

—

まず日本側の三つの史料に登場するゴンチャローフ像

を紹介しよう。

川路左衛門尉聖謨（せいごら）（一八〇一—一八六八）はこの時勘定奉行兼海防掛を務めていた。川路は四人の全権員の中では首席全権の筒井肥前守政憲に次いで第二の地位を占めていたが、筒井は七六歳と高齢のため、事実上川路が日本を代表してプチャーチンとの交渉に当たった。一八五四年、下田で日露和親条約に調印。一八六八年、徳川幕府の崩壊とともに川路は將軍への忠誠を貫いてピストル自殺で果てた。中風を患って、切腹ができなかったのである。彼は『日本渡航記』に一度ならず登場する。ゴンチャロフはこの日本の高官に概して好意を寄せていたようだ。「川路は非常に聡明であった。彼は私たち自身を反駁する巧妙な弁論をもって知性を閃かせたものなのとおこの人物を尊敬しないわけにはいかなかった。彼の一言一句、一瞥、それに物腰までが——すべて良識と、機知と、炯眼と、練達を顯していた。」

川路は長崎行の出発から江戸帰着まで日記をつけていた。このユーモアに富む『長崎日記』は川路にとって、江戸に残してきた妻子、家来に数日分ずつ道中や出張先での様子を知らせる手紙の役割をも果たしていた。この

日記中に都合七箇所ゴンチャロフに関する言及がある。例えば、「今般参り候魯人名前、使節プーチャーチン（布恬廷とするす。この人、第一の人にて、眼ざしたたならず、よほどの者也）、船将ウンコースキ（これは至て穩当なる人にて、いつも笑い居る也。懸合事に少も拘らず）、船将次官ボスシエツト（これは蘭語に通じて、今般の通弁みないたし、諸懸合引受け也。一通りの極才子也）、ゴンチャロフ（此人、無官なれど、セキレタリスのこととなす。公用方取扱というがごとし。常に使節の脇に居て、口出しをするもの也。謀主という躰にみゆ⁽³⁾。）」川路はゴンチャロフのことを「謀主」あるいは「軍師⁽⁴⁾」と呼んでおり、この引用からして、ゴンチャロフがプチャーチン提督の「知恵袋」として交渉に積極的に参加していたことが分かる。これはゴンチャロフの旅記からはうかがい知れぬ事実である。プチャーチンも後に海軍大臣宛の上申書で次のように述べている。「ゴンチャロフは私の任命により日本との総ての交渉の場に出席しているので、恐らく彼をおいては我々の会谈について細大もらさず説明することが出来、閣下の深い配慮に充分に応えられる者はないと思うからです。」

一八五四年一月二〇日の日本側全権員によるフリゲート艦答礼訪問の折りのエピソードを、ゴンチャロフはこう書き留めている。「食事の途中で、私は川路の手からちよつと扇子を借りて見せてもらった。それは、棕櫚の木でつくって紙を貼った質素なものであった。私が扇子を返そうとすると、彼はお納め下さいと身振りで示した。『記念のために』と栄之助「通詞―沢田」が彼の言葉を通訳した。私は謝辞を述べた。しかし、もらい放しにしたくなかったので、自分の時計についている金鎖をはずして川路に贈った。彼はちよつとためらったが、私のあいさつが通訳されるのを聞き終ると、お礼を述べて私の贈物を納めるのであった。それから彼は、席をはずして何やら栄之助に耳打ちをした。それは、つまり川路と筒井が、私とポシェートに煙草の箱と煙管を二組贈物として用意しておくという意味であった。私から金の鎖をもらったので、川路は、多分自分の贈物があまりにもお粗末だと気づいたらしい。」(三七七)これは川路の日記に該当箇所を見出すことができる。「軍師わが扇子をみて称める故に、汝に与えんといいたるに、通詞を以て、常に御手にふれられ候品を下され、忝なく候由を申し、

頓て懐をかかぐりて、トケイを出し、其くさりを取りてわれにくれたり。いかに断りても聞かず。よりて、もらいたる「に」わがトケイをみせよという故に、モゴ物赤面なれどみせたるに、其くさりをわがトケイにつけくれ(3)たり。」

『長崎日記』からの引用を続けよう。「いづれも今一度、飯にても酒にてもと申したるに、魯人程よく食うものはなしと云いて、御笑いあるべしと通弁官いい、軍師はよほどシャレものというがごとき風なる男なるが、いささか酒きげん体にて、夥しく頂戴、という手まねをなしたり。其さま、喉の所へ手やり、又頭へ手やり、やがて頭上へ高く手をさし上げて、うなずきたり(これ、のどまですつたりたるにあらず。頭までもつたりたり。かしらまでもつたりたるにあらず。頭の上へつみあげたるがごとくになれり、(8)ということ也)。おもわず、其体にみなドツと笑を催したり。」この引用は一月二三日、即ち露艦出港前日に日本側全権員の設けた送別の午餐会の折りのことである。これはゴンチャロフ酩酊の場面である。当然のことながら、『日本渡航記』には対応箇所は見出されない。日本との退屈な交渉からまもなく解放され、

またクリミア戦争の勃発とともにいつなんどきイギリス、フランスの軍艦と戦闘状態に入るかもしれないという危険な航海からも解放されて、故国へ帰れるという喜びに浸っていたのであろう。

古賀謹一郎（一八一六一—一八八四）は幕府の儒者の長男に生まれ、当代随一の儒学者だったが、同時に西洋学術の進歩合理性に注目し、洋学研究に強い関心を抱いていた。古賀は全権員のなかでは一番末席で、顧問あるいは専門委員の地位にあり、プチャーチンが提出した露国首相兼外相ネッセルローデの老中宛公文に対する幕府の回答公文の起草に当たった。古賀もゴンチャロフの旅日記に登場する。「四番目は中年男で、まるでシャベルのように無表情な平々凡々とした顔の持主であった。こうした顔を見ていると、彼が、日常茶飯事以外にはあまり物を考えないことが、すぐさま読みとれる。（中略）四人目は「名前は―沢田」……忘れた。後で話そう。（中略）彼ら「日本人―沢田」は満足そうに羊肉を平らげた。わけでも四人目の全権がそうであった。一皿食べ終わると、彼は自分の手で皿を給仕に渡した。つまり、お替り所望の合図なのだ。（中略）彼ら「日本人―沢田」

は旺盛な好奇心をもって少しずつワインを飲んでみたが、しかし、シャンパンのグラスは飲み干さなかった。だが、背の高い肥えた四人目の全権は別であった。彼はシャンパン・グラスを四杯も飲み干した。」（三五三、三五九、三六六、三六七）

古賀が長崎出張時につけていた『西使日記』にも、三箇所ゴンチャロフに関する言及がある。例えば、「大腹夷名良茶呂、謀主也、腹大以呼」。「大腹夷」という呼称はおもしろい。⁽⁹⁾また「ゴンチャロフ謀主」観が日本側全権員共通のものであったことが分かる。

千住大之助（一八一五—一八七八）は佐賀藩士で、藩主の側近として重きをなした人物である。そして一八五三年十二月に彼が藩主とともに長崎へ出張した時の記録が『西亭私記』である。⁽¹⁰⁾千住自身は日露会談の席に連なっているはいないが、儒学者仲間である古賀たちの宿を訪ねて仕入れた裏情報に『西亭私記』には記されており、交渉の矢面に立っている人々の本音が披瀝され、公式の文書類には見られない事実が検証される点で貴重な記録といえる。

本記録にも古賀から聞いた話としてゴンチャロフが

登場する。「公用方甚悪者にて此奴巧計點智、頻に使節にち恵をつくるやふす也」⁽¹⁴⁾。これは川路の記述と符合するが、作家が手ごわい交渉相手だったことをより如実に示している。また「正月四日乗船之図」にはゴンチャロフは「大腹」、「公方用大姦物」と記されている。こちらは古賀の記述と一致する。

二

以下、交渉の経過の大略を日本、ロシア、オランダの史料から追ってみよう。

一八五三年九月初旬に長崎オランダ商館長ドンケルIIクルチウスの助手がバルラダ号を訪問したが、日本人の監視のもとで自由に話し合えなかったこと、商館長自身は結局姿を見せなかったこと、そして「商館長は短い書翰で深い謝意を表明してきたので、提督は彼の表面的な非礼の真意を悟った。」⁽¹⁵⁾(二六四―二六五) ことが『日本渡航記』に手短かに語られている。一方クルチウスの覚え書によると、この一等官補パッスレー⁽¹⁶⁾の訪問の折りに、オランダ商館がロシア艦隊に食料を供給すること、その費用はロシア国庫が為替手形で支払うことが決まった

(最終的には領収書で決済された)。翌年一月二三日までの総額は蘭貨で八七五九・四一フルデンに上った。だがその後プチャーチンは食料以外の持ち出し禁制の品物、例えば漆器類を要求し始め、その搬出願いが奉行に拒否されて、クルチウスは多大の迷惑を被ることとなった。クルチウスがバルラダ号を訪問しなかったのは、長崎奉行がこれを許可しなかったからで、それがプチャーチンの答礼訪問の誘因になるのを恐れたためらしい。クルチウスの方は、提督が自分の訪問中止を他の理由からだとして誤解したと考える残念が⁽¹⁵⁾っている。

一八五三年十一月にロシア使節団が薪炭、食料の補給並びにクリミア戦争の情報収集のため一旦日本を去って上海に行くにあたって、「奉行にもまた、どこへ、どれほどの期間行って来るか、ということは表明しなかった。」⁽¹⁶⁾(三〇六) とゴンチャロフは書いているが、スクーナー船ヴォストーク号の船長リムスキイIICollサコフは両親宛の手紙でまったく逆のことを書き残している。「三カ月の間に彼ら「日本の下級役人―沢田」が提督の性格を非常によくのみこんだことは明らかです。様々な質問や提案をこの上なく巧みに行うことによって、彼ら

は自分の目的を達しました。提督は我々は上海に行き、六週間後に戻る予定であると知らせました。その時に長崎で全権員たちと会見したい、さもなくば直接江戸に向かうだろうと。短気な提督がうっかりこの情報を漏らすやいなや、役人たちの顔は輝きわたり、マソンかなにかのような合図で奉行に遣わされたと思しき小船は、全権員たちのありかとは定かでないという知らせをもって戻ってきました。⁽¹⁶⁾「短気な提督がうっかりこの情報を漏らすやいなや」というくだりにリムスキイ||コルサコフのプチャーチン評価が込められているが、これら二つの相反する証言はどちらも後者の方が信憑性が高そうだ。即ち、ゴンチャロフはできる限りプチャーチンを擁護し、場合によっては事実を若干歪曲してもその立場を貫き通そうとしたのである。

十二月三十一日、長崎西役所で日本側全権員と最初の対面が行われた日の朝、ロシア人のボートがフリゲート艦を離れる瞬間祝砲が放たれた。これは日本の国禁を犯すものであり、古賀の随員で当時江戸の古賀塾で学んでいた米沢藩士・窪田茂遂^{もすい}の『長崎日記』によると、鍋島、黒田、大村藩の警護人が激昂してロシア船を焼き打ちに

しようとしたが、長崎奉行が止めたという。⁽¹⁷⁾「露国使節応接手続覚書」にも同様の記述の後、「直様異人へ及欠合候處、全く下輩之者へ申付方不行届、右様手違ニ相成恐入候、以後一切砲発致ましく趣申出、先穩便ニ相濟候⁽¹⁸⁾」とある。他方、ゴンチャロフの記述を見ると、プチャーチンが奉行から礼砲を発射せぬよう依頼してくるのを見越して、わざと予告せずに発射したこと、そして日本人の周章狼狽ぶりを楽しんでいる感さえあることがうかがえる。「彼ら〔日本の役人―沢田〕は今後はもう発射して下さるな、と懇願し始めた。」(三六一)という作家の証言は、「露国使節応接手続覚書」とはニュアンスを異にしているが、恐らくこちらの方が本当のところだろう。

一八五四年一月四日⁽¹⁹⁾、全権員がバルラダ号を訪問した。これはゴンチャロフの言うとおり、日本人による最初の外国船訪問である。露艦乗組員は歓迎の準備に没頭した。だが全権員の方は、ことよればそのまま外国に連れ去られるのではないかという危惧を抱いて、また艦上で何か異変が起これば日本人もろとも大砲で打ち砕くという打合せのもとに、決死の覚悟で乗り込んだことが、

川路、古賀、窪田、千住それぞれの日記から分かる。千住の日記によれば、古賀は鈍刀をあらためて研磨したという。⁽²⁰⁾「彼ら〔全権員一沢田〕は私のフリゲート艦への招待を、異議を唱えぬばかりか、明らかに満足の念をもって受け入れた。」⁽²¹⁾とプチャーチンが書いているのは、勝手な解釈というものだろう。

当日の宴会は上下ともに大いに盛り上がったようだ。全権員らには提督室の応接間に、他の随員たちには食堂と士官室に食卓がしつらえられた。『日本渡航記』には、「日本人たちはヨーロッパ風の正餐を望んでいたが、彼らにフォークやナイフを使わせて食事をさせるのは無理だったから、箸を添えておいた。」⁽²²⁾とあるが、箸の長さが違ったので、例えば全権員の荒尾と古賀は箸を一本ずつ交換しなければならなかった。⁽²³⁾全権員の饗応には主としてゴンチャロフとポシエートがあたったが、川路はロシア人のもてなしのうまさに感心し、「詞通せなど、三十日も一所に居るならば、大抵には参るべし。人情、少しも変らず候。」⁽²⁴⁾と上機嫌のていである。窪田も、「双方共二酔を帯候得ハ無隔意酔飽。手を取又ハ背を打て戯候人も御座候。矢立を差出、書を乞候人も御座

候。早速書候。但一切読不申。〈中略〉布恬庭^(マテ)も甚喜悅。本國を出帆以来如此の盛事御取扱なしとて落涙ニ至る。」⁽²⁵⁾と書いている。もっとも千住の日記の記述からして、プチャーチンは眼疾の「流涙」だったようだ。⁽²⁶⁾

三

次に『日本渡航記』と日本側の史料を比較対照することによって、ゴンチャロフの慧眼と逆に誤解をも指摘してみたい。まずは誤解の方から。

前述のようにロシア船は三カ月長崎港に逗留した後一旦上海へ出向いたが、日本側の史料を読むと、これが全権員の旅に大きな影響を及ぼしたことが分かる。即ち、ロシア船長崎出帆の知らせが一行に届いて、旅を続けるや否や幕閣の指示を仰ぐため日程が二日遅れになり、次いで十二月二四日ロシア船帰帆の知らせを受け取ったため、以後三日間は宿泊せず日夜兼程で長崎に到着するという大変な旅になった。川路の日記も窪田の日記も、身分の上下を問わず、片道一五〇〇キロ、四〇日間にわたる旅の苦勞と疲勞を訴えている。この点について長崎奉行はありのままをロシア側に説明したにもかかわらず、

後者はその説明を信用せず、全権員が速やかに到着しなければ直接江戸に向かうと威嚇を加えた。『日本渡航記』とプチャーチンの『上奏報告書』を読めば、ロシア側にも誤解があったことが分かる。

十二月三十一日、長崎西役所で全権員と最初の対面が行われ、ロシア人に食事が供されたが、その場面でゴンチャローフはこう書いている。「食事の後で、一種の独特な香気のあるお茶が出された。見ると、底の方に丁子の頭ほどの茶殻がある——茶の国ともあろうものが何とてうまあ野暮なことか！」(三三九) これは作家の誤解で、茶柱は吉事の兆とされ、故意に入れたのである。ちなみに日本側もロシアの茶は気に入らなかつた。古賀はフリゲート艦上でのレセプションの後で、「葉粗煮深、如葉汁」と感想をもらしているが、それに添えた砂糖は絶賛している。⁽²⁶⁾

バルラダ号上での宴の折りのエピソードとして、ゴンチャローフは次のようなことを書き残している。「何やらクリームのような軟らかい生菓子が、ビスケットといっしょに出された。彼「川路—沢田」はそれを食べてみて、定めしお気に召したのであろう、袂から紙を一枚取

り出して皿に残ったものを全部それに移し、一捻りして懷中にしまい込むのであった。『手前がこれをどこかの美人に持参すると思し召さるな』と彼はいい添えた。『いや、これは家来どもに取らせるのでござる。』これを

きっかけに、話は自然に女性談義に移った。日本人たちは軽い破廉恥シニシズムに陥りそうなところまでいった。彼らはあるアジヤ民族と同様に官能に耽って、その弱点を隠そうともせず、また責め立てようともしないのである。」(三三七)

この日本民族論が作家の誤解であるかどうかはさておき、この点に関する川路の記述はニュアンスを異にしている。「もてなしぶりの上手なること、実に驚きたり(異国人、妻のことを云えば泣いて喜ぶという故に、左衛門尉妻は江戸にて一、二を争う美人也、夫を置きて来りたる故か、おり／＼おもい出し候。忘るる法はあるまじきやといいたるに、大に喜び笑いて、使節も遠く来り、久しく妻に逢わざること、左衛門尉が如きにあらず、左衛門尉のこころを以て考えくれ候え、と申したり。筒井より、われを老人也とおもうべからず、此上出生あらば「筒井はこの前年に女子をもうけた—沢田」再会の時の物語にすべしと申したるに、魯西亜の諺に、五

十は出生少し、六十はなし、七十は猶更なし、八十は若やぎて出生殊更多しと申せば、筒井も其諺のごとくなるべきを願ひ奉ると申したり。⁽²⁷⁾」女性談義に関しては、双方互いに責任転嫁を計っているようだ。『日本渡航記』の引用を続ける。「あるとき、提督は「次回の会見を―沢田」二日後に指定したが、驚いたことには、日本側では、もう少し早く、つまり翌日にしてほしいと頼んだ。これは、川路が江戸の夫人の許へ帰りたくなって、会談を急いだためであった。『身は当地にいるが、心は江戸にござりまする』と彼はしばしば語っていた。」(三七二)川路の名譽のために一言すると、これは彼の私的な事情に由来するものではなく、ロシア側に熟考の暇を与えず一気に交渉切りへ持っていくこうとする日本側の戦略であった。古賀の日記に、「我之促期、不欲其「畫策―沢田」成也⁽²⁸⁾」とある。

次にゴンチャロフの慧眼を物語る記述を挙げよう。彼はこう書いている。「彼ら「日本人―沢田」の言葉によれば、將軍は八月十四日に亡くなったことになるが、私たちが到着したのは十日である。將軍が亡くなったのは去年かもしれないが、彼らが今さらこんなことをいい

出すのは、私たちが立ち去るかもしれぬ、という望みを抱いてのことであろう。彼らを信用することはむずかしい。彼らはこうした場合に、少なくとも相当に長い期間、自国の国民に隠し立てをするかもしれないのである。」(二九六)

第十二代將軍・徳川家慶^{いえよし}は一八五三年七月十五日に没した。プチャーチンの長崎到着は八月十日である。長崎奉行がロシア使節に訃報を伝えたのは十月十日だから、バルラダ号の長崎入港二カ月後のことになる。ゴンチャロフのリアルな目はさすがに日本人の本質を見抜いていた。幕府は將軍の薨去を諸外国に知られて足許を見すかされることを恐れ、また国内の人心の動揺を来すことを懸念したのである。従って国民への公表は一カ月後の八月十六日に行われた。

ゴンチャロフの日本に関する知識についても指摘しておかなければならない。フェートン号事件やオランダ最初の日本関係の書物であるカロンの『強き王国日本の記述』についての言及は、不正確な点が見受けられるものの、明らかに作家の日本に関する予備知識の蓄えを物語っている。

四

最後に『日本渡航記』の文学作品としての側面、手法に触れておきたい。

バルラダ号が初めて長崎港に入港した時に、孟蘭盆の精霊流しに遭遇する場面がある。フリゲート艦の長崎入港が八月十日、陰暦では七月十八日あたり、長崎ではこの三日前、七月十五日夜から十六日未明にかけて供え物を持たせて先祖の霊を送っていた。この不可思議な出迎えによって、バルラダ号乗組員のみならず『日本渡航記』の読者もまた一挙に「鍵をなくしたまま閉ざされた玉手箱」(二四六)の国の神秘的な世界に招じ入れられることとなる。ゴンチャロフはドイツ人博物学者ケンペルの『日本誌』によって明らかに盆の行事を知っていた。⁽²⁹⁾にもかかわらず、「ケンペルの本によれば……」(二四六)とその説明をカットすることによって、ゴンチャロフは鎖国状態にある東洋の島国の神秘性を保持しようとしたのである。

『日本渡航記』では日本国と日本人が「眠っている」様子が繰り返し描き出される。「夢」、「眠ったような」

「眠る」という語句が反復して用いられていることは注目に値する。と同時にゴンチャロフは、わずかとはいえ日本の新しい萌芽、「覚醒」の要素をも慧眼に捉えている。川路がまさにそうであり、何人かの若い通詞たちがそうである。この「眠り」と「覚醒」の原理の対比はゴンチャロフの創作の核をなすものである。

「Jeune Japon [若き日本—沢田]」(二九四)の最たるものは大通詞の森山栄之助(一八二〇—一八七二)だろう。阿蘭陀通詞は十七世紀初頭から存在し、通詞家は世襲で三十数家あった。幕末には一四〇名ほどいたという。大通詞と小通詞それぞれ四名が通詞の中心的存在だった。栄之助はオランダ語のみならず英語にもすぐれ、幕末外交の中心的通訳官だった。会議の席では筒井の通訳を吉兵衛が担当し、川路の通訳は栄之助が担当した。川路は自分の通訳の有能さを高く評価していた。「栄之助別段なる差働これ有り候ものにて、通弁殊の外達者に、蘭書を訳すること、手紙をかくがごとし。」⁽³⁰⁾

ゴンチャロフは繰り返し栄之助に言及しているが、その評価は川路とは異なる。作家は彼の才能を認めつつも、厳しいコメントを述べている。「一番いやらしい態

度を取っていたのは栄之助である。彼は川路付の通詞だったから、交渉の中でも、もっとも大事な部分を通訳していた。彼は思いがあっていて、他の通詞たちの話には馬耳東風であった。川路がいなるときには、椅子にもたれて長々と寝そべっていた。大体、自分が偉くなったのを鼻にかけていて、会谈の終りごろには、最初よりもはるかに態度が悪くなった。彼は放蕩も嫌いな方ではなかった。再三シャンパンをねだり、一度は中村の前でシャンパンを四杯もおおって酔い過ぎ、彼にいわれたことを通訳しないで、手前勝手に話を決めようとするので、他の通詞を呼ぶぞ、と脅かされたこともある。」(三七五)

これと好対照をなすのが、同じく大通詞の吉兵衛だろう。西吉兵衛(一八一二—一八五五)は阿蘭陀通詞・西家の第十一代目。オランダ、フランス、アメリカ、ロシア船渡来に際し応接勤務した。川路の『長崎日記』に興味深い記述がある。「吉兵衛は、才気は栄之助ニ不及といへとも、通弁之事ハ近世希なるもの之よし、栄之助即吉兵衛之門弟なり、温厚にて不爭、栄之助を引立、同人ニ事を譲るさて実^ニに及ふへからず、吉兵衛ハ、栄之助難有御引立大悦之由、并同人と懇意也とハ申せとも、栄之

助は門弟也とは少も不申、栄之助は、吉兵衛に八才之節より通弁之弟子に成候よし屢申之、かかる事小事ながら、甚出来兼る事なり」⁽³¹⁾

吉兵衛も度々『日本渡航記』に登場する。ゴンチャロフの描写にあっては大通詞まで昇りつめた能吏としての側面は捨象され、この、作家と同年の通詞は、栄之助とは逆に「眠り」の原理を体現する人物となっている。

吉兵衛は、「手前は何もせず臥せている」(原文イタリアク体「沢田」のが好きでござる」(三〇三)と言う。これぞ「日本のオブローモフ」である。だが彼の登場は常にユーモアに包まれていて、読者の心を和ませてくれる。「吉兵衛は身の程をわきまえていた。彼は歯をむき出して隅の方にかしこまり、四方八方に向って、ヘッ、ヘッ、ヘッ、ヘッ、ヘッ」と呼ばれるたびに、彼は素早くあちらこちらの方へ向き直り、『ヘッ!』と答えるのであった。『キチベエ!』と私は一度冗談に呼んでみた。すると、彼は『ヘッ!』と応えて、私の方へいざり寄って来た。だが、間違いだとわかると、人のよい笑いを浮かべて元の席へ這い戻って行った。」(三七五) この「人のよき」は、川路の日記中の性格付けと見

事に符合する。

即ち、栄之助と吉兵衛の両者において体现されているいま一つの対立原理は、「知」と「情」という、ゴンチャロフが既に『デビュー作』『平凡物語』において提示し、『日本渡航記』以後の作品でも提示し続けていくものである。

本稿は、高野明・島田陽共訳『ゴンチャロフ日本渡航記』(雄松堂書店、一九六九年)所収の高野氏による訳注¹⁾G. A. Lensen. *Russia's Japan Expedition of 1852 to 1855* (University of Florida Press, Gainesville, 1955) 中村喜和「幕末期日露交流の一面——ゴンチャロフが見た日本人と日本人の見たゴンチャロフ——」(『言語文化』第三一巻、一九九四年、三一—五頁)に負うところ大である。また長崎歴史文化協会の越中哲也氏、佐賀大学名誉教授・杉谷昭氏、下田市教育委員会の土橋一徳氏、同市郷土史家の平井繁氏にはご教示と貴重な資料を賜った。記して感謝の意を表する。

- (1) 本稿の日付は旧ロシア暦で統一する。
 (2) 正確には『フリゲート艦バルラダ号』の第一巻第一章

「一八五三年末と一八五四年初頭の日本におけるロシア人」と第三章「日本におけるロシア人」のことであるが、本稿ではこれらの章の邦訳に与えられた表題を用いる。

(3) И. А. Гончаров. Фрегат «Паллада». Очерки путешествия в двух томах. Л., «Наука», 1986, с. 372. 以下『日本渡航記』からの引用は、本文中の括弧内に頁数を記す。

- (4) 川路聖謨『長崎日記・下田日記』平凡社、一九六八年、九三頁。
 (5) 川路、前掲書、九三、九八、九九、一〇三、一〇四頁。
 (6) 一八五四年七月三一日付。平井繁訳『ロシア使節アチヤーチン提督関係文書』ディアナ号探査会、一九八九年、十一頁。
 (7) 川路、前掲書、九九頁。
 (8) 川路、前掲書、一〇三—一〇四頁。
 (9) 古賀謹一郎『西使日記』『大日本古文書 幕末外国関係文書附録之一』東京帝国大学文学部史料編纂掛、一九一三年、二四四頁。
 (10) 一八五三年九月十五/二七日付の N・A・マイコフ夫妻宛の手紙を参照のこと。И. А. Гончаров. Указ. соч., с. 675—679.
 (11) 「西亭」は千住の筆名。この日記について詳しくは、杉谷昭『幕末維新史料拾遺』第一法規出版、一九九二年、一一—六四頁を参照のこと。
 (12) 杉谷、前掲書、一六八頁。

- (13) 杉谷、前掲書、四八頁。
- (14) J. A. G. A. L. Bassle.
- (15) フォクス美弥子編訳『幕末出島未公開文書 ドンケル＝カールチウス覚え書』新人物往来社、一九九二年、四六、四七、五八、六〇、六七、七五、七十七頁。
- (16) В. А. Римский-Корсаков. Балтика-Амур. Повествование в письмах о плаваниях, приключениях и размышлениях командира шхуны «Восток». Хабаровское книжное изд-во, 1980, с. 237. この文献について詳しくは、William W. Mosmie, Bakumatsu Japan through Russian Eyes: the letters of Kapitlan-leutenant Voin Andreevich Rimsky-Korsakov; Bakumatsu Japan through Russian Eyes: the letters of Kapitlan-leutenant Voin Andreevich Rimsky-Korsakov, Part II, 1854—1857. 『長崎大学教育学部人文科学研究报告』第四八号、一九九四年、三五—五一頁、第四九号、一九九四年、二二—三九頁)を参照のこと。
- (17) 『米沢市史編集資料第十四号 窪田茂遂著 長崎日記』米沢市史編さん委員会、一九八四年、九六頁。この日記について詳しくは、拙稿「窪田茂遂『長崎日記』について」『共同研究 ロシアと日本』第二集、一九九〇年、十七—三二頁)を参照のこと。
- (18) 「十二月十四日長崎西役所露国使節応接手続覚書」『大日本古文書 幕末外国関係文書之三』一九九一年、三二六頁。
- (19) 日本側の記録では一月三日になっている。
- (20) 杉谷、前掲書、十五頁。
- (21) Всеподданнейший отчет генерал-дьяконта графа Путятина о плавании отряда военных судов наших в Японию и Китай, 1852-1855. Морской сборник, СПб., 1856, No. 10, отд. II, с. 58.
- (22) 古賀、前掲書、二四四頁。
- (23) 川路、前掲書、七二頁。
- (24) 窪田、前掲書、一〇四—一〇七頁。
- (25) 杉谷、前掲書、三七—三八頁。
- (26) 古賀、前掲書、二四三頁。
- (27) 川路、前掲書、七二頁。
- (28) 古賀、前掲書、二五二頁。
- (29) そこには次のように記されている。「8月8日: この日は盆(ぼん)祭で、夜には燈籠や提灯に灯を点し、祖先の墓詣りをする。盆祭の行事は、昨日から始まっており、明日まで続くのである。死者の精霊は、善人であろうが悪人であろうが、この盆の時期にはあの世からこの世へ彷徨に出て生前の住居を訪れるという信仰があるのである。」(エンゲルベルト・ケンベル著、今井正編訳『日本誌(改訂・増補)―日本の歴史と紀行―』下巻 霞ヶ関出版、一九八九年、三五〇頁。
- (30) 川路、前掲書、五〇頁。
- (31) 『大日本古文書 幕末外国関係文書附録之一』九六一—九七頁。(埼玉大学助教)